

「信」をめぐるアウグスティヌスの理解

菊 地 伸 二

はじめに

アウグスティヌスは、「信」「信ずる」ということを、一体、どのように理解していたのであろうか。今日残っている彼の著作は、そのすべてがキリスト教信仰を前提としており、その意味で、この問題は、彼の全著作に浸透しているともいえるものである。また、それらは、キリスト教信仰を前提としている以上、「信」「信ずる」ということの理解も、その中で規定されていて特段に着目すべき点はないようにも思われる。

しかしながら、アウグスティヌスが、キリスト教という特定の宗教を信仰していたということと、彼が「信」をどのように理解していたか、ということとは一応切り離して考えることが可能であらう。

実際、彼の初期から後期の著作を貫く一つの線として、「信」の問題を、たえず「知」の問題との関わりで探求していたということが存しており、その理解は、後の中世哲学にも多大な影響を及ぼしたことは周知のとおりである。

他方、彼の「信」の理解には、それを「愛」との関係において展開した跡も見られることもたしかなことである。

それでは、全体として、アウグスティヌスは、どのように「信」を理解していたのであろうか。彼が、キリスト教信仰を有していたということは別にして、このことは、それ自体取り上げる価値のある問題であると考えられる。

前者の、「信」の問題を「知」の問題との関わりで問題にしたということについては、たとえば、次の二つの箇所に見られる定義を見れば一目瞭然であらう。すなわち、『霊と文字』(31,54)では、「信ずるとは、言われていることが真実であることに同意することに他ならない (Quid est enim credere, nisi consentire verum esse quod dicitur?)」と言われ、『聖徒たちの予定』(2,5)では、「信ずることそのこと、それは、同意をもって考

えることに他ならない (Ipsum credere nihil aliud est, quam cum assensione cogitare)」と言われているとおりである。

そしてこの理解は、中世の神学者であるトマス・アクィナスの『神学大全』(II-II, Q.2, a.1)の「信ずるとは、同意をもって考えることである (credere est cogitare cum assensione)」という定義につながっていくことはたしかなことである。

一方、後者の、「信」を「愛」との関連で思索している痕跡については、次の二つを取り上げることができよう。すなわち、『ヨハネ福音書講解』(29,6)では、「神を信ずること、それは、信じながら愛し、信じながら愛好し、信じながら彼のうちに入り、信じながら彼の肢体となることである (Quid est ergo credere in eum? Credendo amare, credendo diligere, credendo in eum ire et eius membris incorporari?)」と言われており、『エンキリディオン』(32,121)では、「今は神を私たちは信を通じて愛しているが、かのときには直視を通じて愛する。そして隣人それ自身をも今は信を通じて愛しているのである」と言われているとおりである。

このように、「信」は「知」との関係で、あるいは「愛」との関係で問題にされ思索が為されているが、そのような「信」は、全体としてどのように理解したらよいのであろうか。

そこで本論では、「信」「信ずる」という問題を、比較的まとまった仕方ですら正面から扱っている作品を三つ取り上げながら、「信」の全体的理解を目指して考察を進めていきたい。

I. 『信ずることの効用』における「信」

まず、「信」「信ずる」という営みの積極的な側面を取り上げ、そのことについてまとまって論じている初期の作品である『信ずることの効用』か

ら考察を始めることにしたい。

(1)『信ずることの効用』の執筆をめぐって

この作品は、アウグスティヌスが、マニ教に属していたときにそこに引きこんだ友人であるホノラトゥスが、アウグスティヌス自身が、そこから脱退した後もなおも留まっていることに対して、そこからの脱退を呼びかけた作品でもある。その冒頭は次のように始まっている。

ホノラトゥスよ、もしわたしが、異端者であることと異端者を信ずることがまったく同じであると考えているならば、口でも筆でもこの問題については沈黙すべきであると判断したであろう。が、実際はこれら二つのことのあいだには大きな違いがある。

Si mihi, Honorate, unum atque idem videtur esse, haereticus, et credens haereticis homo, tam lingua quam stilo in hac causa conquiescendum mihi esse arbitrarer. Nunc vero cum inter hanc duo plurimum intersit; (1,1)

『信ずることの効用』は、「信仰」「信」を題材にした作品であるとともに、マニ教徒を反駁した作品の系譜にも属している。

上記の言によれば、異端者 (haereticus) であることと異端者を信ずる者 (credens haereticis) であることとの違いが、彼のなかで明確になったことがこの作品の執筆動機になっている。この両者の違いについては、次のように言われている。

異端者とは、私見によれば、何かこの世の利益や自分の名誉および権力をえるために、目新しい誤謬説を考えだしたり、それを追い求める人である。その種の人々を信ずる人とは、真理や敬虔のある種の外観によってだまされている人々である。

Quando quidem haereticus est, ut mea fert opinio, qui alicujus temporalis commodi, et maxime gloriae principatusque sui gratia, falsas ac novas opiniones vel gignit vel sequitur; ille autem qui hujusmodi hominibus credit, homo est imaginatione quadam veritatis ac pietatis illus. (1,1)

さらに、本書の執筆の意図については、次のよ

うに述べられている。

わたしの意図することは、できるならば、カトリック信仰の権威にしたがい、清い心で見られるあの真なるものを直観できる前に、信じることによってあらかじめ防壁を築き、神の照明に備えている人々をめがけて、マニ教徒たちが、冒涇的な仕方、無謀に攻撃していることを、できれば、あなたに証明したいということである。

Est igitur mihi propositum, ut probem tibi, si possim, quod Manichaei sacrilege ac temere invehantur in eos qui catholicae fidei auctoritatem sequentes, antequam illud verum, quod pura mente conspicitur, intueri queant, credendo praemuniuntur, et illuminaturo praeparantur Deo. (1,2)

ここでは、「信ずる」という営みが、キリスト教の権威を受け入れるという形で、ある種の安定的な立場に身を置くことになることが示されている。

それでは、この作品の中で、「信ずる」という在り方は、どのように考えられているのであろうか。続く二節で、二つの側面から検討することにした。

(2)「信ずる」という在り方(1)知・信・憶測の関係

まず、本作品では、「信ずる」という在り方は、知、憶測との関係で、認識論的に位置づけられている。

宗教においては二種類の人々が賞賛に値する。その第一は、すでに真理を発見した人々である。私たちはこういう人々がすでに至福の状態にいると判断しなくてはならない。その第二は、非常な熱意をもって、かつもっとも正しい方法で求める人々である。前者はすでに真理を所有しており、後者はその途上にあるが、それによって真理に到達することは確実である。他に、強く非難し、かつ嫌悪すべき三種類の人々がいる。

第一は、憶測する人々、すなわち、知らないことを知っていると思っている人々。第二は、自分が知らないことに気づい

ているが、それを見出すことができるように求めることをしない人々。第三は、自分が知っていると考えもせず、また求めようともしない人々。

同様に、人間の心の中には、互いに隣接しているが、区別しなければならない三つのものがある。すなわち、理解すること、信ずること、憶測することである。

これら三者は、それ自体として考えると、第一は常に誤りなく、第二はときどき誤り、第三はいつも誤るものである……したがって、私たちは、理解することを理性に、信ずることを権威に、憶測することを誤謬に負っているのである。しかしすべて理解する者は信じているし、またすべて憶測する者も信じている。だが、信じる者は必ずしも理解しない。憶測する者は決して理解しない。

(11,25)

ここに明確に示されるように、「信ずる」という在り方は、真理を探究するという志向性の中で位置づけられている。「理解する」とは、いわば真理を発見した状態であり、その反対に、「憶測する」とは、じっさいには真理を発見していないにもかかわらず、そのつもりになっている状態である。「信ずる」とは、まだ真理を発見していないが、それを知っていて、そのために、真理に向かって探求を続けている状態と言えるであろう。

ただ、それ自体として捉えたと、「信ずる」という在り方は、「理解する」こととは異なり、誤る可能性を逃れているわけではなく、しかしそのことを自覚しているために、「理解する」ことへと向かう、志向的で動的な性質を有している。

アウグスティヌスが本作品で強調しているのは、「信ずる」ことを真理探究という枠組みの中で、探求の原動力として捉えている点にある。

(3) 「信ずる」という在り方(2)健康を回復する働きとしての信

次いで、そのような志向性の中で捉えられた「信ずる」ということが有している安定性をもたず側面に着目したい。

結局、心をあらかじめ耕し、かつ準備するために神によって定められたことを信ずること

によって、自分自身がまず真理を把握するのにふさわしいものとなることにまさって、健全な道がありうるであろうか。(10,24)

「信ずる」という在り方を、「理解する」ことへと至る確実な方法として彼は捉えているが、それと同時に、真理を受け取るために、心がそれにふさわしくなる、そのための準備が不可欠であることが強調されており、「信ずる」ことは、まさしくその営みとして捉えられているのである。

あなたが理性によって捉えることができないときに、理性の前に信じ、かつ真理の種を受け取るために信そのものによって心を耕すことは、ただ単にもっとも健全であるのみならず、そうすることなしには病める心に健康が回復することはできないのであって、そのための不可欠な条件だと、わたしは判断するからである。(14,30)

ここでは、真理は、いわば心に蒔かれる種としてたとえられており、それが蒔かれるために、あらかじめ心が耕されていることが必要であり、それが、「信ずる」という営みとして捉えられている。さらには次のように言われている。

というのは、彼らは、どんなにすぐれた才能を持っているとしても、神が共におられなければ、地面を這い回るだけだからである。だが、神は、ご自身を求める者たちのなかに、人間社会に対する配慮があるとき、彼らと共におられるのである。こういう立場にまさって、天国に入るのに確固とした立場を発見することは難しい。

Cuiusmodi enim libet excellant ingenio, nisi Deus adsit, humi repunt, Tunc autem adest, si societatis humanae in Deum tendentibus cura sit. Quo gradu nihil firmitus in caelum reperiri potest. (10,24)

ここでは、「信ずる」という言葉は用いられないものの、神を求めるということは、周囲の人々と無関係に成立するものではなく、むしろ、周囲の人々を配慮しながら求めるときに、そこに神が共にあるということが言われている。

「信ずる」という在り方は、真理の探究という志向性の中で位置づけられているとはいえ、そこでは周囲の人々との関わりが同時に重視されている

のであり、その在り方こそ、確固としたものであると言われている。このことは、「信ずる」という営みが、けっして認識論的な側面からのみ捉えられているわけではなく、むしろ、他者との関わりの中で問題とされていることを示す限りにおいて注目されてよいであろう。

Ⅱ. 『神を見ること、あるいは手紙147』における「信」

続いて、『神を見ること』と題された手紙を取り上げ、そこにおいて展開されている「信」の理解を検討することにしたい⁽¹⁾。

(1) 『神を見ること』の執筆をめぐる

アウグスティヌスは、生涯のあいだに、「神を見る」こと、すなわち「見神」について少なくとも六つの作品を著している。すなわち『手紙』92、『手紙』147、『手紙』148、『手紙』162、『説教』277、『神の国』第22巻（第29章）である。年代的には、最初の『手紙』92が408年、最後の『神の国』第22巻が422年であるから、そのあいだに15年近くの開きはあるが、いずれも、彼が50歳を過ぎてからのいわば円熟期の作品に属している。

さて、『神を見ること』は、そのうちの『手紙』147に付けられた題名であり、「見神」についてもっともまとまった叙述がなされている413年の作品である。パウリナという敬虔な女性が、「不可視なる神が身体の眼によって見るができるかどうか」と質問してきたことに対して答えるという形をとっており、もちろんこの問いに対しては、神はそれ自体不可視的な本性であるから、身体の眼によって見るができないことは当然であると即答することも可能であったかもしれないが、この作品を読むかぎり、アウグスティヌスはそのような答え方をしていない。むしろ、パウリナがこの問いにおいて望んでいたことがらを理解しようとしながら、丁寧に応答しているように見受けられる。

(2) 『神を見ること』の概要

この作品は、まえがきと23の章、合計54の節か

ら成り立っており、内容的には大きく三つの部分に分けることができる。すなわち、第一の部分は、まえがき（1節）から5章（16節）までであり、第二の部分は、6章（17節）から15章（37節）までであり、第三の部分は、16章（38節）から23章（54節）までである。以下、それに従って見ることにしよう。

第一の部分は、まず「神を見る」という場合の「見る」という意味が問題とされ、神は、太陽や空などが見られる場合のように、身体の眼によって見られるわけでもないし、精神のうちのさまざまな働き（たとえば自らの意志作用、自らの知性認識など）が見られる場合のように、精神の眼によって見られるわけでもないことが確認される。しかしそれにもかかわらず、「神を見る」ことが私たちによって信じられるのは、聖書のうちに「心の清い人々は、幸いである。その人たちは神を見る」（マタ5. 8）と記されているからに他ならないからであると言われる。ここで聖書の言葉を疑わずに信ずることが強く求められるとともに、聖書以外にも、私たちにとって信ずることが有益であるほかのことがらについても言及がなされ、身体的もしくは精神的に見ることとは区別される、信ずるという領域についての言及がなされる。そのなかで彼は、信ずることと見ることとの関係について、見ることは、身体的な眼による場合であれ、精神的な眼による場合であれ、現前するものに関わるのに対して、信ずることは、現前しないものに関わることであり、およそ私たちの知識は、見られるものと信じられるものから成り立っていることを確認するとともに、私たちは、「心の清い人々は、幸いである。その人たちは神を見る」という聖書の言葉を信じており、その限りで私たちは神を見ること（ができること）を知っている、という立場から議論を進めていく。

第二の部分は、主としてアンブロシウスの『ルカによる福音書注解』からの引用とその箇所解釈から成り立っている。引用されているのは、天使がザカリヤの神殿に現われた場面をめぐるアンブロシウスが注解をほどこしているところであり、その限りで、聖書の注解の、そのまた注解という体裁をとった部分であるが、この引用の引き金となっているのは、聖書において、一方で「い

まだかつて、神を見た者はいない」(ヨハ1. 18)と言われているにもかかわらず、他方で、多くの人たちが神を見たことが記されていることから、この場合の「神を見る」とは一体どのように理解すべきか、ということである。第一の部分とのつながりで言うならば、その場合の神の現前とは、どのように考えるべきか、ということである。ここでアウグスティヌスは、「現われる」という言葉に注目しつつ、それらの人々に神が現われたというのは、神の不可視的な本性そのものが見られたわけではなく、むしろ、神がその意志の望むままに、その本性を隠しながら、それらの人々に現われることを望んだその姿が見られたことであると解釈する。したがって、その場合の神はあくまでも神それ自身ではないのであり、そのことから、「いまだかつて、神を見た者はいない」という言葉はその真性を少しも失うことはない結論づけるのである。

しかしながらこの帰結は、それでは私たちが神をあるがままに見ることができることが期待されるのはいつのことであり、またそれは如何なる仕方であるか、という新たな問題を生み出す。これについては、端的に言うならば、それは御子が現われるとき、すなわち再臨のときであり、私たちが天使と等しい者となるときであるとされる。さらに、神があるがままに見られるとき、それはアンブロシウスが「神はある場所において見られるのではなく、清い心において見られるのである」と語るように、可視的なもののように見られるのではなく、霊的な眼(まなざし)によって見られることが示唆されている。

第三の部分では、アンブロシウスのテキストの解釈を終えた後、パウリナに対してこれまで述べられたことを、ひとつひとつ理性の光に照らしながら検証することを呼びかける。また、復活の際における霊の体ということも問題とされるが、その際に持つことになるであろう、そのような身体が有する眼によって神を見ることについては、神の不可視性ということから、それは身体的な眼によるというよりも、むしろ霊のまなざし、清い心によるものであるという見解に傾斜している。

(3)「見る」と「信ずる」こと

前節では、『神を見ること』の概要を述べたが、パウリナの「不可視なる神が身体の眼によって見ることができるかどうか」という質問に対しては、神は身体の眼によってばかりか、精神の眼によっても見られることはない、一度ならず念を押しており、聖書の「いまだかつて、神を見た者はいない」という箇所を根拠としながら、同じく聖書に記された、かつて神を見たと言われる人々については、彼らが見たものは、ありのままの神自身ではないと解している。

つまり、「神を見る」ということは、これまでのところ人間のうちにはまだ実現していないことなのである。が、しかし将来においては、「神を見る」ことは、信ずる者のうちに約束という形で与えられているのであり、このことから、「見神」の問題は、神が見られることを信ずることができるかどうかということにもつながってくるのである。そこでここでは、「見る」と「信ずる」とこととの関係について少し詳しく見ることにしたいと思う。

ところで、「見る」と「信ずる」とこととの関係については、次のように言われている。

見ることと信ずることとの間には、現前するものは見られるものであり、現前しないものは信じられるという違いがあるということである。(2.7)

この場合の「見る」とは、空に太陽を、地上に山や木を見るという場合のように、身体によって認識することと、自らが欲していることや意志していることや思考していることを魂のうちに見るという場合のように、魂によって認識することの両方を含んでいるが、いずれにしても、それは、知覚の間近にあるという意味で現前している状態にある。

それに対して、「信ずる」とは、たとえば、ある人が、わたしにあることを語って、その人の意志を示そうとするとき、その人の顔と音声はわたしに現前するが、わたしに示されたその人の意志そのものは、身体と魂の知覚からは隠れ、わたしはそれを信ずるが、見ることはない、ということからも明かなように、知覚の間近にないという意味で現前していない状態にある。

このように、「見る」と「信ずる」とは、現前しているか、していないかということによってひとまず線引きが可能となるが、たとえば、かつて見たことを記憶していることが確実であるような場合には、それは今の時点で現前しているとは言えないものの、「見る」という系列に属すると判断される。こうして、アウグスティヌスは次のように述べる。

私たちの知識は、見られるものと信じられるものから成り立っている。私たちが見たものや見ているものの場合には、私たち自身が証人となる。他方、私たちが信じているものの場合には、私たちがほかの証人によって信ずることへと導かれるのである。(3,8)

ここにおいて、「見る」ということだけでなく、「信ずる」ということも、知識に属することが言われている。ただ、「見る」という場合には、自らがその証人となっているが、「信ずる」という場合には、自ら以外の証人の存在が不可欠となっており、証人が自ら以外にどうか、ということが両者の区別の基準となっている。さらに、両者がともに知識であるということについては次のようにも述べられている。

知識はたしかに精神に属しており、身体の感覚を通してであれ、魂自身を通してであれ、知覚され、認識されるべきものを保持している。見られないものは信仰によって信じられるとはいえ、その信仰自体はたしかに精神によって見られている。(3,8)

つまり、「見る」ということと「信ずる」ということのあいだには、現前しているか、していないかという違いがあると先に述べたが、「信ずる」ということのうちにもやはり現前している部分があることがここでは語られている。そして、その限りにおいて、「信ずる」ということも、「見る」ということをそのうちに含んでいることになる。

さらにアウグスティヌスは、ある人（以下Aとする）が、別のある人（以下Bとする）の証言によって、キリストの復活を信仰するということが起こる場面を想定し、そのなかで、「見る」とことと「信じる」ことを区別しながら、次のように述べるのである。

Aに対してBが、キリストが死人のうちから

甦ったことを信じなさいと語るとき、もしAがそれを信ずるならば、Aは一体何を見ており、また何を信じているかということに注目し、その両者を区別しなさい。

Aは、その声を発しているBを見ている。上述のことに従えば、声そのものは物的対象のうちに含まれる。証人Bと証言とは二つの別のものであり、そのうちの一方は眼に、他方は耳に属している。しかし、おそらくその証言が、神によって記された書物に基づいている、という事実によってAは信仰へと動かされ、この証人Bは（Aにとって）確かなものとなる。聖書はもしそれを読むならば、身体が目によって見られるものに属するし、それを聞くならば耳に属する。

他方、音声によって意味されていることがらについては、Aはそれを自らの心において見ている（理解している）。またAは、自分は信じているとためらわずに答えるその信仰をも見ているし、その告白を通して、入信しようとする自らの意志をも見ている。また、Aは自らの心でキリストの復活の像も見ている。もっともAが、自分が信じている、とするその信仰を見るその見方と、自らの心でキリストの復活の像を見るその見方とは異なっている。

というのも、AはBから語られた時点で、たとえそれを信じなくても、その像を見る（想像する）ことができるからである。

ともあれ、Aは上記のこれらのことをすべて見ている。一部は身体によって、一部は精神によって。

しかし、Aが、その人から聞いて信じようとする、当のBの意志そのものや、キリストの甦りそのものの事実については、Aは見ているのではなく、信じているのである。

Aが見ていると言われるのは、Bの証言に対してAが信仰し、それに基づいて心のまなざしで見ているものである。

じっさい、Aが見ているものは、魂乃至は身体の知覚がそこにあるものであり、他方、Aが信ずるものとは、魂乃至は身体の知覚が不在のものである。AがBから聞いて信じよう

とする B の意志は過ぎ去ったものではなく、その語る B のうちにとどまる。

それを語るまさしく B が、自らのうちにそれを見ている。他方、それを聞く A は、それを見ているのではなく、信じているのである。ところで、キリストの甦りは過去のものであるが、それをそのとき生きていた人々も見なかったのである。

なぜなら、キリストが生きているのを見、かつキリストが死んだのを見た人々は、キリストの甦りが生じたとき、甦りそのものを見たわけではなく、生き返ったキリストを見、触れることによってキリストが死んだことを、まったく確実なものとして信じたからである。

私たちは、彼が甦ったこと、そのとき人々によって見られ、触れられたこと、また今天において生きていて、死んではいないこと、死が彼を支配しなかったことをすべて信じている。しかしこのことがそれ自体は、天地がここにあるというように、私たちの身体感覚に間近にあるわけでも、私たちがこのことを信ずる信仰がここにあるというように、私たちの精神のまなざしに間近にあるわけでもない。(3,9~4,10)

(4) 「信ずる」ことの成立

さて、前節で述べられたことを元にしながら、「信ずる」ということがどのように成立するかということについてここで見ておきたい。

まずは、証人による証言の発話ということがある。ある出来事を目撃した者が言葉によって相手に伝えるという場面である。

さて、証人から証言を聞いた者は、そのことを「信ずる」ことができるようになるためには、まず、証言について、そこで言われていることについて感覚的にも、あるいは内容的にも認識することができていなければならない。すなわち、証言の感覚認識および内容理解という段階がある。次に、その証言内容について、それが正しいかどうかということをめぐる判断、すなわち、証言内容の判断ということが置かれる必要がある。そしてその際に、その内容について正しいという判

断がなされたときに、それに同意するという形で、証言内容への同意、すなわち「信ずる」ということが生じると考えられる。

このようなプロセスからもわかるように、「信ずる」ということは、証人と証言を介在させる認識であるのであるが、自らは、そのような無媒介でないことを認識している。

また、認識論的なプロセスは上記のようなものであるとしても、証人による証言が、それを聞く者にとって「信ずる」べきものとして受け入れられるためには、語る者と聞く者との間のパーソナルなことがらをまったく無視することはできないと思われる。その意味で、「信ずる」とはペルソナ的なものとも言うことができるであろうし、そこには、ペルソナ相互の愛も関連してくると思われる。

Ⅲ. 『見えないものへの信仰』における「信」

さて、最後に、『見えないものへの信仰』を取り上げ、そこにおいて展開される「信」の理解を検討することにしたい⁽²⁾。

(1) 『見えないものへの信仰』の執筆をめぐる

『見えないものへの信仰』という作品の執筆動機については、その冒頭のところで次のように言われている。

キリスト教では、見られるものが示されないで、見えないものに対する信仰が人々に命じられているために、キリスト教は支持されるべきではなく、むしろ嘲笑されるべきであると考えている人がいる。

それゆえ、私たちは、見ることのできないものを信じないことが自分たちにとって賢明であると考えている人々を斥けるために、たとえ私たちが自分たちの信じている聖なるものを人々の視覚に示すことができないとしても、見えないものでさえも信じられるべきであるということを、人々の心に示すことにしたいと思う。

Sunt qui putant christianam religionem propterea ridendam potius quam tenendam,

quia in ea, non res quae videntur ostenditur, sed fides rerum quae non videntur, hominibus imperatur. Nos ergo ad hos refellendos, qui prudenter sibi videntur nolle credere, quod videre non possunt, etsi non valemus humanis aspectibus monstrare divina quae credimus tamen humanis mentibus etiam illa quae non videntur credenda esse monstramus.(1)

この文章に記されているキリスト教を嘲笑すべきであると考えている人が、具体的にどのような人であるかは示されていない。おそらくはこの時代は、ローマ帝国においてすでにキリスト教が公認されていたので、キリスト教を信奉しない異教徒を示している可能性もある。キリスト教は、いわゆる可視的なものに対する信仰を要求することなく、むしろ、見えないものに対する信仰を重視するのであるが、それがこの世のご利益を重んずる宗教からすれば、批判的になっていたのかもしれない。

なおここに、「見えないもの」と訳された言葉の原語は、res quae non videntur であり、直訳すれば、「見られないもの」ということになるが、それは一体如何なるものを指しているのだろうか。

以下、本作品の概要を、とくに、「信」の問題に関係する範囲で触れておきたい。

(2)『見えないものへの信仰』の概要

この世界には、たしかに、肉の目を通して認識されるものがあるが、その本性が見えないものに属し、不可視的である魂そのものの中には、それ以外にも数え切れないほどのものが存している。そしてその中には、それによって信ずる信仰も、信ずるか信じないかをそれによって判断する思惟も含まれている。

私たちは、眼前にあるものを肉の目によって認識する一方で、現存する自らの意志や思惟を——それらは魂の中に存していることから——魂自身によって認識している。

ここでいう、魂自身によって認識しているという表現については、別のところでは、より内的な視力によって認識しているとも言われる。

ところで、可視的なものであれ、不可視的なものであれ、現前しているものについては、認識することが可能であるが、たとえば、私たちは、自分の友人の意志をどのようにして知るのであろうか。

相手の意志は、それがどれほど近い相手のものであるにせよ、少なくとも肉の目によって認識することはできない。それでは、相手の心で起こっていることがらを、私たちは自分の心によって見ることはできるのであろうか。

しかし、結論的に言うならば、そうした意志は、目に押印されるような色や形でもなく、耳に滑り込み耳を打つような音響でも歌でもなく、また、私たちの心の働きによって経験的に感知されるような、私たち自身のもの（私たちの意志や信念や思惟）でもない。

このことから、相手の意志は、見られることも聞かれることもなく、また、私たちの中で、内的に感覚的に観察されるものでもなく、信じられるべきもののひとつとして位置づけられることになる。つまり、相手の意志については次のように言われている。

自分自身の心に従って、それを元にして、自分自身のものでない心を信ずるのであり、自分の身体のままざしも精神のままざしも向けることができず、適用できないところで、信仰を用い委ねるのである。

ex corde tuo, credis cordi non tuo; et quo nec carnis nec mentis dirigis aciem, accommodas fidem.(2)

このように、たとえば、相手の意志というのは、それ自体見えないもの（見られないもの）であるが、それを信ずることによって、私たちは相手のことを受け入れることができるのであり、それについては、次のように言われている。

私たちは、自分たちが逆境にあるときにその友人の真実な心を確認するが、そのときでさえ、私たちは、自分たちに向けられたその友人の好意を、目で見るとよりも、むしろ信じているのである。

私たちは、見ることはできないがゆえに信じべきであるのであるが、信じるべきものを、いわば信仰の目によって見るよう、適切

に判断することができるのは、まさに信仰が大いなるものであるからである。

Cum ea malis nostris bona probaverimus, etiam tunc eorum erga nos benevolentiam credimus potius, quam videmus: nisi quia tanta fides est, ut non incongruenter quibusdam oculis ejus nos judicemus videre quod credimus; cum propterea credere debeamus, quia videre non possumus.(3)

ここに、肉の目（身体のみなごし）でもなく、より内的な視力（精神のみなごし）でもない信仰の目という表現がなされている。

友人の意志は、この作品の表題にもあるように、いわゆる「見られないもの (res quae non videntur)」に属しているが、私たちはそれを、この信仰の目によって「見られるもの」と見做している。

以上のことから、見えないものは信じられるべきでないという主張は斥けられることになる。というのも、もしこの主張に固執するならば、愛そのものは見ることはできないので、誰であれ、自分が他者から愛されていることすら知ることができなくなり、そのゆえに、相互の愛によって成り立っているすべての友情は滅び去ることになるだろうからである。さらにアウグスティヌスは次のように言う。

もし、私たちが、見ることでできない人間の意志を何ら信じないならば、人間のことがらは根底から破壊される。(4)

私たちの社会は、身体のみなごしであれ、精神のみなごしであれ、見ることでできるものだけで成り立っているのではなく、むしろ、見えないものを信ずることによって成り立っている。

その一例として、私たちは、自分たちの両親が本当に自分たちの両親であることについては、すでにそれが過去のものとなっているために、確実に示すことはできないが、他人——それが親戚であれ産婆であれ——がそのことを語ることによって信じているのである。

そしてもし、そのことを信ずることができないとすれば、両親に対する不信感だけが結果することになり、そこには心の一致というものはもはや存在しなくなり、およそ人間の交わりというものは

は成立しなくなるであろう。

ところで、友人の好意であれ、その親切な心であれ、それらのものは、それ自体としては見ることはできないものではあるが、それをさまざまな証拠によって見出すことは不可能なことではないのであり、本作品では、そのようなところに重要点があると思われる。

(3)『見えないものへの信仰』の「信ずる」ことの特徴

以上、『見えないものへの信仰』という作品について、その執筆の動機と概要について見てきたが、一体アウグスティヌスはこの作品において、「信ずる」ということをどのように理解しているのであろうか。

ここでは、アウグスティヌスが、「信ずる」ことをどのように特徴づけているか、ということに注目しながら検討することにしよう。

まず確認できることは、「信ずる」ということが、とくに相手の意志に関わることで持ち出されてきているということである。

もう一度、その部分を引用するならば、次の通りである。

そうした意志は、目に押印されるような色や形でもなく、耳に滑り込み耳を打つような音響でも歌でもない。また、私たちの心の働きによって経験的に感知されるような、私たち自身のものでない……自分自身の心に従って、それを元にして、自分自身のものでない心を信ずるのであり、自分の身体のみなごしも精神のみなごしも向けることができず、適用できないところで、信仰を用い委ねるのである。(2)

つまり、「信ずる」ことの特徴として指摘されることの第一は、それが対象とするものがみなごしの及ばない、見ることでできないところに関わっているという意味で、対象に関する、「信ずる」ことの「不可視性」と呼ぶことができるであろう。ところで、アウグスティヌスは、「信ずる」ことの重要性について次のように語っている。

もし、私たちが、見ることでできない人間の意志を何ら信じないならば、人間のことがらは根底から破壊される。

すなわち、私たちはお互いに信じあうことによって、多くの人間関係、もっと言うならば、人間社会は形成されているのであり、もし、誰であれ、自分が他者から愛されていることすら知ることができず、そのことのゆえに、信ずるべきではないということになるならば、相互の愛によって成り立っているすべての友情は滅び去ることになってしまうのである。その意味で、「信ずる」ということは、私たちの人間関係、私たちの共同体を根本から支えているのであり、きわめて重要な意味を有している。私たちは、このことを「信ずる」ことの「共同性」と呼ぶことができるであろう。

ところで、この作品では、「見えないもの（見られないもの）」のなかには、信ずるべきことが存在していることが確認された後に、「見えないもの（見られないもの）」は、如何なる場合でも不可視的なものに留まっているわけではなく、むしろ、さまざまな証拠を通して明示されることが多く、キリスト教においてもそのような例が数多くあることが指摘される。そしてその場合の証拠とは、単に視覚的なものを意味するのではなく、聖書に記された言葉もまた証拠ないしは証言として含まれており、そのような証を通して、「信ずる」ことへと導かれることが可能となるのである。

すなわち、「信ずる」ことは、見られることがらにのみ関わっているのではなく、聞かれることがらにも関わっていることがわかる。

ただ、「信ずる」ということに関して、次のようにも言われていることを無視することはできないであろう。

私たちは、自分たちが逆境にあるときにその友人の真実な心を確認するが、そのときでさえ、私たちは、自分たちに向けられたその友人の好意を、目で見るよりも、むしろ信じているのである。私たちは、見ることができないがゆえに信じるべきであるのであるが、信じるべきものを、いわば信仰の目によって見るよう、適切に判断することができるのは、まさに信仰が大いなるものであるからである。(3)

つまり、私たちは、目で見えないものを信じているわけであるが、そのようなことを、「いわば信

仰の目によって見る」と表現しているのである。ここで言われている「信仰の目」という表現については、例えば、『手紙120』(2,8)に、「まだ見ていないものを真であると見做していること、自分が信じているものはまだ自分が見ていないことを確実な仕方で見ている (Habet namque fides oculos suos, quibus quodammodo videt verum esse quod nondum videt, et quibus certissime videt nondum se videre quod credit)」とあるように、認識論的な脈絡で用いられるのが本来的な在り方であることはアウグスティヌス自身も承知していたと思われる。

すなわち、彼によれば、「見る」ということは、現前していることがらと結びつけて考えられており、一般には、「信ずる」ということは、そのような現前を欠いたことがらに当てはまるのであるが、「いわば信仰の目によって見る」と使われている限りにおいては、「信ずる」ということも、何らかの形で対象を目の当たりにしている、あるいは、対象に触れていると考えられているのではないかと推測されるのである。私たちは、このことを「信ずる」ことの「可触性」と呼ぶことができるであろう。

対象に何らかの形で触れているという捉え方は、「自分自身の心に従って、それを元にして、自分自身のものでない心を信ずるのであり、自分の身体のかなざしも精神のみなざしも向けることができず、適用できないところで、信仰を用い委ねる」というくだりにある、対象に委ねていくという在り方にもつながっていくのではないかと考えられるのである。

以上、「信ずる」ことの特徴を、「不可視性」「共同性」「可触性」という三つの視点から捉えたのであるが、この『見えないものへの信仰』という著作は、たしかに小品ではあるが、「信」の認識論的性質も重視しつつ、なおかつ「信ずる」という在り方の相手の中に身を委ねて、触れながら、一つになっていくという、信と愛との関係にも目配りをした、そのような視点をもった、彼の後期の著作の一つとして見做してよいのではないかとと思われる。

おわりに

以上、アウグスティヌスの三つの作品、すなわち『信ずることの効用』『神を見ること、あるいは手紙147』『見えないものの信仰』を取り上げながら、「信ずる」ということについて述べてきた。

アウグスティヌスは、カトリック教会の司祭になって以来、ずっとキリスト教信仰を信奉してきたことはたしかなことであり、その意味では、たとえば『信仰と信条』や『信仰・希望・愛』に示されている教会の信条や教理については、終始変わらず信じてきたことは間違いないことであろう。

とはいえ、長年変わらずカトリック教会に属し、キリスト教信仰を保持してきたということと、「信ずる」ということのうちに理解していた意味内容が変化していないということは、必ずしもイコールではないように思われる。むしろ、アウグスティヌスにおいては、時間の経過に伴い、「信ずる」ことの意味内容が、より豊かになっている側面が少なからずあったのではないだろうか。

そこでここでは、二つのことに限定して述べることにしたい。

ひとつは、ある意味で大きな話であるが、アウグスティヌスが巻き込まれた三つの論争との関わりである。具体的には、それはマニ教論争、ドナティスト論争、ペラギウス主義論争である。

マニ教は、善悪二元論的な思想を有しており、当時、理性的なキリスト教を標榜して隆盛をきわめていた。ドナティストは、とくに、サクラメントに関して厳しい基準を有しており、サクラメント執行者、すなわち聖職者の人間性、道徳性がサクラメントに影響を与えることを主張するとともに、教会共同体は、この世において聖なる空間を築かななくてはならないことを強調した。ペラギウス主義は、人間の有する自由意志の可能性を高く評価し、最低限の神からの恩恵を受けつつも、人間の責任の領域を広げる主張をした。

アウグスティヌスは、これら三つのそれぞれの立場に対して、10年から20年間ぐらいかけて論争を行っている。これら三者は、それぞれが思想的こだわりをもっている分野も異なっており、こ

で三者の共通性を指摘することはきわめて難しいことである。

ただ、前章で確認した不可視性、共同性、可触性という視点から、アウグスティヌスの信仰を見ようとするとき、人間の魂のうちに神的要素を認めることにより、結局は神の不可視性（超越性）を否定するマニ教、また、聖なる領域を築くことにより、他者との共同ということに対して厳しい見つめ方をするドナティスト、さらには、神からのたえざる恩恵の働きかけを重視しないペラギウス主義、これらの主張に対して、彼は、カトリック信仰の立場から反駁を加えて続けていたと思われる。アウグスティヌスの場合、まさしく、このような生涯を貫く論争を通して、その信仰理解が深まっていったのではないかと考えられるのである。

もうひとつは、「不可視性」「共同性」「可触性」という視点から、「信ずる」ということを捉えるようになった背景には、恩恵論の問題があったのではないかということである。

アウグスティヌスにおいては、自由意志の存在を強調する時期もたしかにあったが、『シンプリキアヌスへ』についての『再考録』のなかに「ついに恩恵が勝った」という記述がある。

これは、超越する神からの働きかけが、私たちに先立ってあり、そのことによって、神が私たちと共にあるということが実現することを意味している。そして、その現実を受け入れること、このことこそが信仰であり、「信ずる」という在り方に他ならないのである。

このように考えるとき、恩恵の問題と深く関わる自由の問題は、もちろん意志の問題との関係で、理解しなくてはならないことは言うまでもないことであるが、単にそれだけでなく、「信」「信ずる」ということとの関わりにおいて、考察を深める必要も生じてくるであろう。しかし、このことに関しては、また機会を改めて検討することにしたい。

註

- (1) 菊地伸二「アウグスティヌスにおける〈見神〉——『神を見ること』を中心に——」(『ヴィア・メディア』第4号、2004年、ウ

イリラムス神学館)を参照のこと。

- (2) 菊地伸二、「信ずることをめぐるアウグスティヌスの理解——『見えないものへの信仰』を中心に——」(『平安女学院大学研究年報』第9号、2009年、平安女学院大学)を参照のこと。

On *fides* in Augustine

Kikuchi, Shinji*

アウグスティヌスは「信」「信ずる」ということを一体どのように理解していたのであろうか。

彼の初期から後期の著作を貫く一つの線として、「信」の問題を、たえず「知」の問題との関わりで探求していたということが存しており、その理解は、後の中世哲学にも多大な影響を及ぼしたことは周知のとおりである。

他方、彼の「信」の理解には、それを「愛」との関係において展開した跡も見られることもたしかなことである。

それでは、全体としてアウグスティヌスは、どのように「信」を理解していたのであろうか。

アウグスティヌスの三つの作品、すなわち『信ずることの効用』『神を見ること、あるいは手紙147』『見えないものの信仰』を取り上げながら、「信」の全体的な理解を試みる。

たしかに、「信」を「知」との関係で、認識論的な枠組みで捉えようとする構図は終始貫かれているものの、「信仰の目」という表現に見られるように、「信」を単に「知」との関係で理解するのではなく、「愛」との関係で理解しようとする領野も確保していたと考えられる。

キーワード：信と知，信と愛，信仰の目